

氏 名：長 尾 幸 恵

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 7 0 号

学位授与年月日：平成 2 9 年 3 月 1 5 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：終末期患者と家族への卓越した看護：

一般病棟における患者の意向に沿った支援

Expertize of Nursing for Patients and Their Families in the
End-of-Life Phase:

Support in Line with the Will of Patients on General Wards

論文審査委員：主査 本 庄 恵 子

副査 高 田 早 苗（正研究指導教員）

副査 川 原 由佳里（副研究指導教員）

副査 福 井 小紀子

副査 遠 藤 公 久

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景・目的】

多死社会を迎え病院から地域在宅へとシフトが始まってはいるものの、多くの人が病院の一般病棟で死を迎えている。先行研究では一般病棟での終末期看護の困難が取り上げられる傾向にあった。しかし、小児など限られた領域における熟練看護師による優れた終末期看護実践が報告されている。本研究ではこれをさらに発展させ、一般病棟の熟練看護師のナラティブをもとに終末期における患者の意向に関わる看護を描出したいと考えた。研究目的は、一般病棟における患者の意向に沿った終末期を支える看護実践を熟練看護師のナラティブをもとに記述し、終末期患者と家族への卓越した看護実践を明らかにすることである。

【研究方法】

ナラティブアプローチを用いた。病棟師長及び同僚から優れた実践を認められている 3 病院 9 名の参加者を得て、3～5 回のインタビューを行った。初回に事例を語ってもらい、2 回目以降にテーマに関連する場面や看護師の思考並びに感情に焦点を当てたインタビューを重ねた。得られたナラティブを患者の経過と看護実践を軸に再構成した。看護師の実践の意味や卓越性の観点から解釈し、テーマを見出した。9 名の参加者から得られた 9 事例を通して見出された卓越した看護実践の特質を確認した。

データ収集期間は、予備調査も含めて、2014 年 12 月～2016 年 9 月であった。予備調査、本調査共に、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認のもとに実施した。

【結果】

実務経験 5 年～22 年の 9 名の看護師がそれぞれ語った事例とそこに見出された看護の卓越性を示すテーマは次のように命名された。

「家族に見守られる最期につなげる」

「父子の時間を紡ぎだす」

「親子のよい時間を願い、支え続ける」

「大切なものを見つけ、家族の思い出に刻む」

「生きる力を支えることに全力を尽くす」

「患者の世界に飛び込む」

「家族に託した思いを叶える」

「治療への希望を否定せずに、病状の追認を待つ」

「患者の周辺を整え、家族が荷を下ろせる状況をつくる」

さらに、これらの事例における看護師の卓越した実践には次の 5 点の特質が共通して見出された。

1. 意向の深い意味を捉える

表現された患者の意向の真意について、タイミングを図りながら時に慎重に探り時に率直に関わり、背景的な意味を考えに入れて解釈していた。これが 2. を可能なものにしていく。

2. 家族のありように迫り、患者と家族をつなげる

家族が患者の終末期を実感できる場をつくり、最後に向かう心の準備を整え、患者の意向に近い家族にとって可能な接点を探りだし、共に過ごす時間につなげた。

3. 一般病棟の制約と特性をケアに生かす

これまでのかかわりで知った患者の人となりや家族関係の理解をケアに生かし、入院継続を望む患者に一時的な退院を提案して自宅で家族と過ごしきっかけとするなど、制約までもケアに生かしていた。

4. その人を大切にするケアに挑み続ける

患者の選択を尊重し、苦悩を共に引き受け、患者の強さと弱さを見守り、患者が保ちたい姿を家族の心に刻むなど、その人のありようを大切にするケアに挑戦していた。

5. 看護チームとしてのケアを実現させる

自分の実践だけではなく、チームとしてのケアを大切にしており、他の看護師を刺激し、時に家族の気持ちを代弁するなどして患者と家族に関心を向けさせ、メンバーの力を生かしてチームワークを生み出していた。

【考察】

患者の意向の通りに進められる事例は少なかった。看護師はその意向の真の意味を探ることにより、実現の幅を広げ家族の理解や協力を得やすい終末期の過ごし方を導き、家族への様々な働きかけと相まって家族と共に過ごす時間を生み出していた。家族の気持ちが離れた状態で患者の意向をかなえるよりも、患者と家族の絆が強まり、よい最後につながると見受けられた。これらの実践を生み出す契機としての患者と家族の生き抜こうとする強さ、そこに気づき導かれて生まれるケアが卓越した実践につながっていると考えられた。

論文審査の結果の要旨

多くの患者が死を迎える一般病棟における熟練した看護師による終末期にある患者の意向を尊重した患者と家族への支援に見出される卓越した看護を探究するという意欲的な研究である。

終末期における患者の意向を尊重する支援はその重要性は認識されながらも、デリケートな話題に触れることの難しさ等があることから、先行研究はきわめて限られている。また、特に一般病棟における終末期看護に難しさを感じる看護師は少なくない現状を考えると、研究の意義は十分なものと評価された。9名の参加者へのナラティブインタビューにより、様々な制約や困難がありながらも患者の意向を尊重し、その通りではなくとも家族の参加を得て意向に近い、あるいはそれ以上の終末期の過ごし方の実現を支援した看護実践が語られ、各々終末期患者とその家族の経過と看護実践を軸とする事例として再構成されている。

序論において研究疑問に関する背景や先行研究結果の検討から研究目的を導き、その方法論を述べ、収集したデータから結果を述べている論述は、わかりやすく一貫性がある。参加した看護師にとって特別な意味をもつ患者について語るナラティブアプローチにより、ある程度記憶が鮮明であり場面や状況がリアルに浮かび上がる語りが得られ、結果的に質的研究で重視される生き生きとした記述につながっている点では成功と言える。ただ、研究の限界で触れられているように、表れている患者や家族の姿はあくまでも看護師の眼で捉えられたものであり、この範囲で読む必要がある。患者家族にとってどうであるかについては、別の研究として取り組まれる必要があろう。

このような優れた実践が可能であることを示した意義は大きい。今後さらにこのような実践が一部の熟練看護師のみではなく、多くのジェネラリストに開かれる可能性を探究する研究へと進めることを期待したい。

本博士学位論文審査会では、学位規程第3条により、審査の結果、博士(看護学)の学位論文として「合格」と判定した。その後、最終試験を行い、「合格」と認めた。